

鶏肉

◆飼養動向

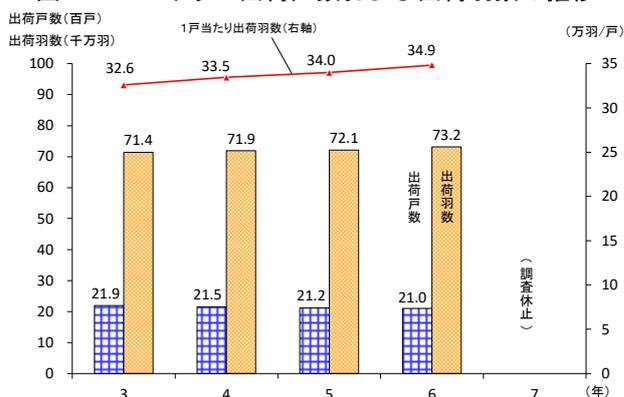
7年2月現在の出荷羽数は前年比1.5%増

ブロイラーの飼養動向は、小規模農家の減少や大規模層（年間出荷羽数50万羽以上）のシェアの拡大を背景に、出荷戸数は減少傾向で推移する一方、1戸当たりの平均飼養羽数や平均出荷羽数は年々増加傾向にある。

令和6年のブロイラーの出荷戸数は2100戸（前年比0.9%減）と前年をわずかに下回った（図1）。また、出荷羽数は7億3192万9000羽（同1.5%増）と前年をわずかに上回った。この結果、1戸当たり出荷羽数は34万8500羽（同2.5%増）と前年をわずかに上回った（図1）。

なお、ブロイラーの出荷戸数および出荷羽数を規模別に見ると、ブロイラーの出荷羽数が50万羽以上の層は、出荷羽数全体の53%、出荷戸数全体の15%をそれぞれ占めており、同割合は増加傾向となっている。

図1 ブロイラー出荷戸数および出荷羽数の推移



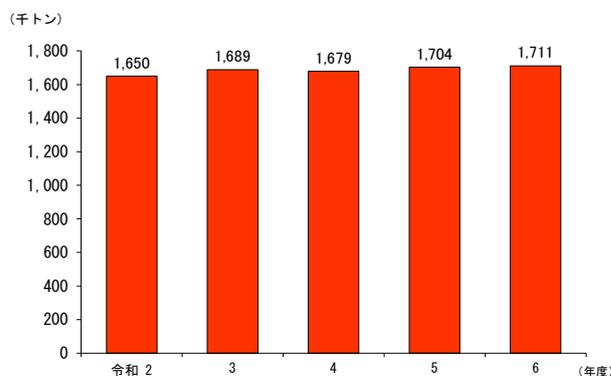
資料：農林水産省「畜産統計」
注1：各年2月1日現在。
注2：令和7年は農林業センサス実施年のため、データなし。

◆生産

6年度の生産量、前年度比0.4%増

鶏肉の生産量は、消費者の健康志向や根強い国産志向による堅調な需要を背景に、増加傾向で推移しており、令和6年度は171万1025トン（前年度比0.4%増）と前年度をわずかに上回った（図2）。

図2 鶏肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計
注：骨付き肉ベース。

◆ 輸 入

6年度の輸入量、鶏肉は前年度比1.7%増、鶏肉調製品は同6.5%増

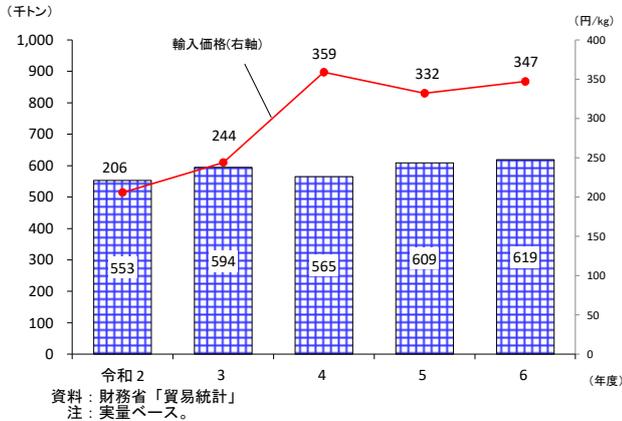
鶏肉

鶏肉の輸入量（冷凍品）は、国内の鶏肉消費量の約4分の1を占めており、近年は50万トンを超えて推移している。

令和5年度は、ブラジルでの高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）発生による影響は見られたが、リスクを見込んだ前倒しでの輸入やタイからの代替輸入により、前年度を上回った。6年度も、国内の節約志向や外食・中食などの好調な需要を受けて、61万8754トン（前年度比1.7%増）と前年度をわずかに上回り、輸入量は過去最高を更新した（図3）。

輸入価格（CIF）は、1キログラム当たり347円（同4.5%高）と前年度をやや上回った。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格（CIF）の推移

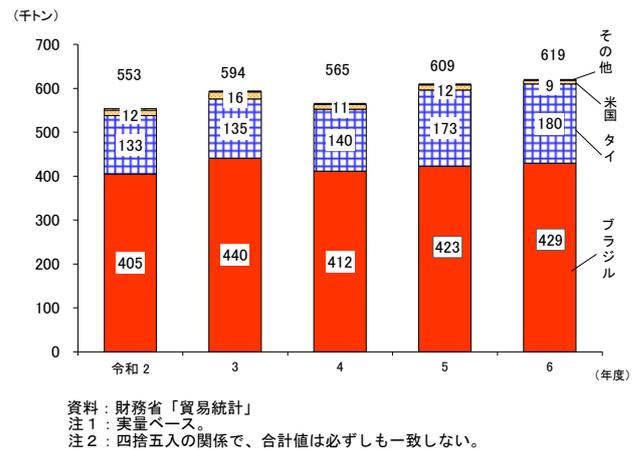


国別の輸入量を見ると、全体の7割を占めたブラジル産については、42万9383トン（同1.6%増）と前年度をわずかに上回った（図4）。

タイ産については、平成25年度の輸入再開以降、細かい規格への対応が可能であることなどから一定数量のニーズを得て推移しており、6年度は18万151トン（同4.1%増）と前年度をやや上回り、5年連続の増加となった。

米国産については、クリスマス需要などに向けられる骨付きもも肉が多くを占めており、8567トン（同30.5%減）と前年度を大幅に下回った。

図4 鶏肉の国別輸入量の推移



鶏肉調製品

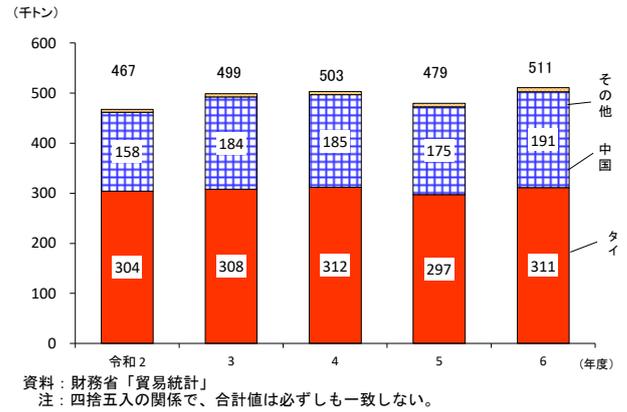
鶏肉調製品（加熱処理や衣付け、調味した鶏肉など）の輸入量は、近年、外食・中食需要の高まりや消費者の簡便志向などを背景に増加傾向で推移している。

主な輸入先は、加熱処理施設が多数存在するタイおよび中国となっており、両国からの輸入量の合計で全体の98%を占める。

令和3年度以降、輸入量は堅調に推移しており、5年度は円安などの影響により減少したが、6年度は中食需要が回復し、51万786トン（前年度比6.5%増）と前年度をかなりの程度上回った（図5）。

国別の輸入量を見ると、タイ産は、平成30年度以降、30万トン程度の輸入が続き、6年度は31万1359トン（同4.8%増）と前年度をやや上回り、全輸入量に占める割合は61%となった。中国産についても、19万906トン（同9.0%増）と前年度をかなりの程度上回り、同割合は37%となった。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量の推移



◆消費

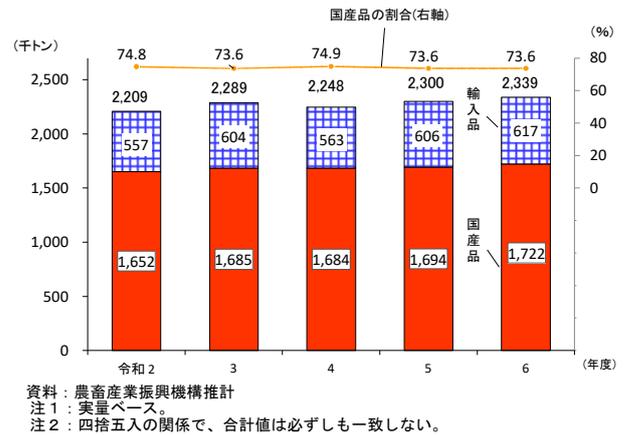
6年度の推定出回り量は前年度比1.7%増、家計消費量は同2.6%増

鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の低価格志向や健康志向の高まりなどにより、特にむね肉を使った商品開発が進んだことなどから、おおむね増加傾向で推移している。

令和6年度は、引き続き外食や中食需要が堅調であることなどから233万8744トン（前年度比1.7%増）と前年度をわずかに上回った（図6）。

出回り量の内訳を見ると、鶏肉消費量全体の約4分の3を占める国産品は、堅調な需要が継続したことで、172万2122トン（同1.7%増）と前年度をわずかに上回った。また、主に加工・業務用に利用されている輸入品も同様に61万6622トン（同1.7%増）と前年度をわずかに上回った。なお、合計に占める国産品の割合は73.6%と前年度と同水準となった。

図6 鶏肉の推定出回り量の推移

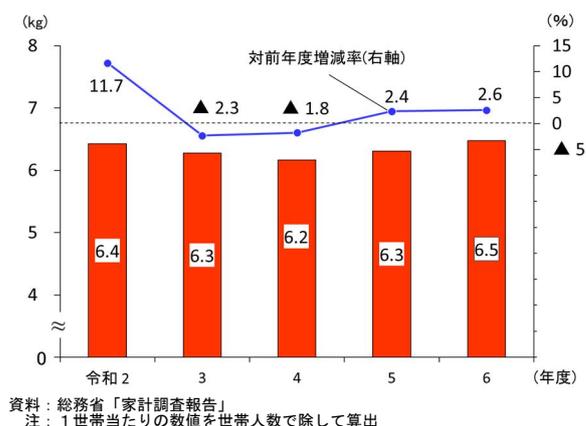


家計消費

鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、消費者の健康志向の高まりに加え、食肉の中での価格優位性を背景に、長期的には増加傾向で推移している。

令和2年2月下旬以降、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響による巣ごもり需要が増加する中、食肉の中でも比較的安価な鶏肉の購入数量が増加し、3年度以降、巣ごもり需要に一定の落ち着きは見られたが、外食需要の回復により、6年度は年間1人当たり6.5キログラム(前年度比2.6%増)と前年度をわずかに上回って過去最高を更新した(図7)。

図7 鶏肉の家計消費量(年間1人当たり)の推移



◆在庫

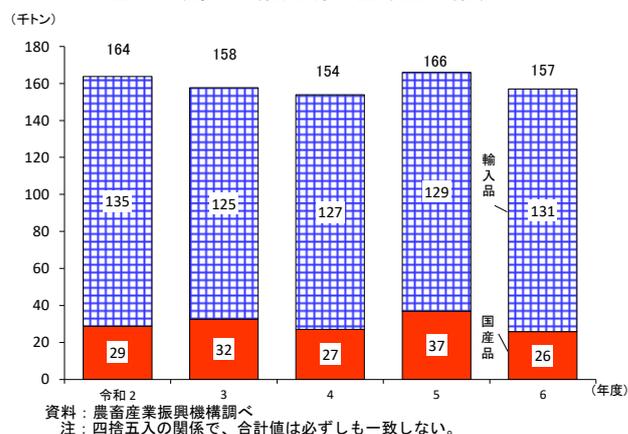
6年度の推定期末在庫量、前年度比5.4%減

鶏肉の推定期末在庫量は、その約8割を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。

令和6年度は、輸入鶏肉の高騰から国産鶏肉の引き合いが増えたことなどから、15万7013トン(前年度比5.4%減)となり、2年ぶりに前年度を下回った(図8)。

このうち、輸入品は13万1242トン(同1.7%増)と前年度をわずかに上回った一方、国産品は2万5771トン(同30.1%減)と前年度を大幅に下回った。

図8 鶏肉の推定期末在庫量の推移



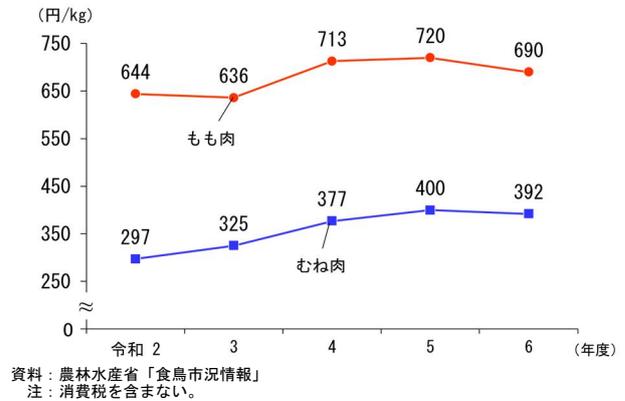
◆卸売価格

6年度の卸売価格、もも肉は前年度比4.2%安、むね肉も同2.0%安

国産鶏肉の卸売価格（プロイラー卸売価格・東京）は、日本では「もも肉」に対する消費者の嗜好^{しこう}が高いことから、価格水準が「むね肉」に比べて高くなっている。「もも肉」は、主にテーブルミートに仕向けられており、「むね肉」は総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用が多くなっている。

「もも肉」については、安定的な需要は継続しているが、夏場の低需要期に向けて低下し、年末の需要期に向けて上昇する例年の季節性の変動があったことなどから、令和6年度の卸売価格は1キログラム当たり690円（前年度比4.2%安）と前年度をやや下回った（図9）。「むね肉」についても、堅調な需要は継続しており、2年度以降上昇傾向で推移していたが、6年度は同392円（同2.0%安）と前年度をわずかに下回った。

図9 国産鶏肉の卸売価格（東京）の推移



◆小売価格

6年度の小売価格（もも肉）、前年度比0.7%安

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、近年、100グラム当たり130円を超えて推移している。

同価格は、令和3年度に4年ぶりに前年度を上回って以降、上昇傾向で推移していたが、6年度は卸売価格の下落などにより同143円（前年度比0.7%安）と前年度をわずかに下回る結果となった（図10）。

図10 鶏肉の小売価格（もも肉・東京）の推移

